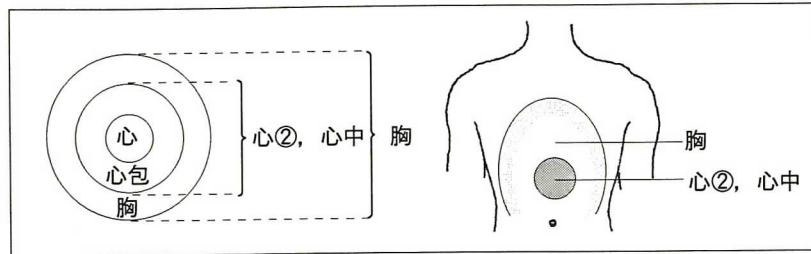


心・心中・胸の違い

心は、①五臓の一つである心の臓。②心の臓の存在する場所（心のあるあたり）の二つの意味がある。

心中は、主として②の意味で使用される。ただし大柴胡湯の「心中痞鞭」は、心下に相当する。の受まで使用されることもある。

胸は、膈より上で肺でない部分、西洋医学的には縦隔に相当する。胸は心、心中より広い範囲を示す。またこれらはしばしば同じような意味にも使用される。



『大漢和辞典』より

痺

①しびれる ②リウマチス ③矢の名 ④ならぶ ⑤疵に通ず ⑥もと痺に作る

2. 胸痺の症候

脈：陽微陰弦，寸口脈沈而遲，関上小緊数

痛：胸背痛，心痛徹背，背痛徹心

満痞：心中痞，胸満，胸中気塞

呼吸：喘息，咳唾，短気，不得臥

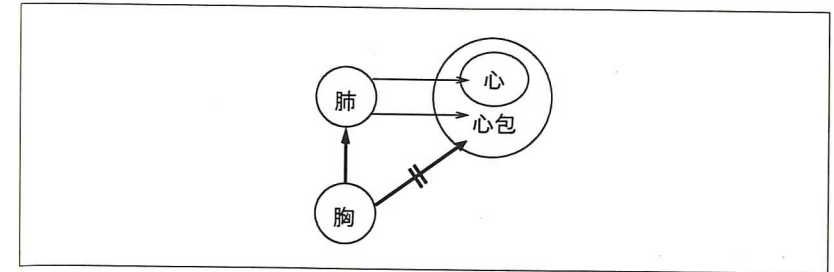
胸痺の主な症候としては、胸背痛，心痛徹背などの胸・心・背の疼痛と，喘息・咳唾・短気あるいは不得臥などの呼吸器症状がある。他に心中痞・胸満・胸中気塞などの，胸気の不利を示す症状がある。

3. 胸痺の病理

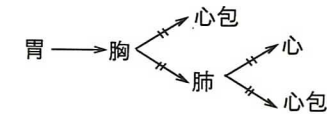
胸痺証の主な病理として、①胸気不利と、②心包絡の不通の二種がある。

① 気津を胸から心包に供給するルートが障害されて生じる。

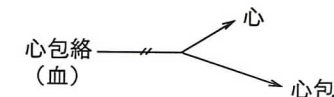
その病因としては、痰（熱痰，寒痰など），飲（痰湿），気滯などがある。



胸気が不利すると、胸から肺へのルートが障害されることもある。



② 心包の絡が不通となり，心包，心が血により養われなくなって生じる。また①の胸から心包への気津が供給されなくなると，心包の絡も二次的に不通となる。



これに対して結胸証は，水熱（あるいは水寒）が互結して痰に変化したものが胸に存在する。胸痺証は病因が痰のみではなく，他の病因（水湿，気滯，瘀血）もあるので，結（互結の意味）を使用せず，痺（閉塞不通の意味）を使用する。胸痺は，心の構造物に対しての胸の機能失調，あるい

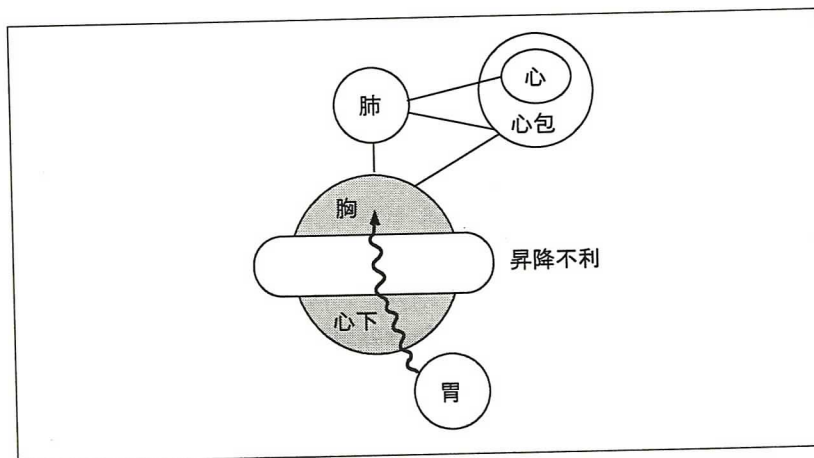
仲景方、厚朴用四両、薤白半斤、水五升、煮取二升。

『外台秘要方』卷第十二／胸痺心下堅痞緩急方四首の枳実湯（枳実薤白桂枝湯）は、金匱要略と同じで、薤白、栝楼実、桂枝を二三沸としている。

枳実薤白桂枝湯の煎じ方は、宋版の金匱要略において、薤白、栝楼実、桂枝を数沸、わずか2～3秒煎じるとある（外台秘要も同じ）。半斤（約120g、千金は一斤）という比較的多量の薤白を、わずか数沸で抽出するのは不可能に近い。また全栝楼も数沸で抽出されるような生薬ではない。したがって煎じ方に関しては、千金の煎じ方（五味を一緒に七升の水で二升半に煎じる）の方が理にかなっている。

枳実薤白桂枝湯証は、胸中に痰濁が存在するため、胸・心下の昇降が不利する。気機の不利した心下・胸に向かって、胃氣が暴発的に上昇し、激しい胸痛を生じる。

痰濁は日常の不摂生より、胸中には痰を生じてはいるが、胸氣不利をきたす程度ではない。しかしさらにStress（精神的、気候、飲食不節）が加わり、ついに胸氣不利をきたし、胸痺となる。いったん胸痺の発作を起こすと、胸陽不振となり、陽氣は脈中・脈外・皮につながらず、顔面蒼白、冷汗をきたす。胸痺を起こすまでの胸中の痰は、熱痰、寒痰のどちらもありうる。

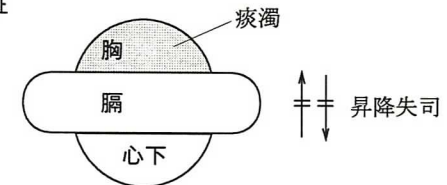


【脇下逆搶心】

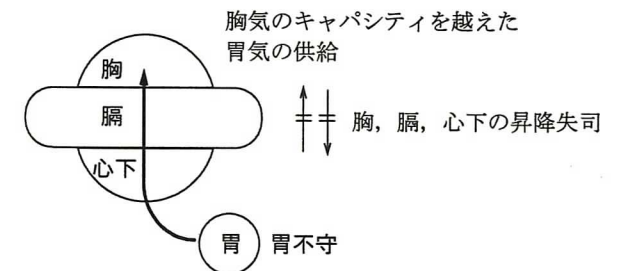
昔の戦闘に使われる武器として、槍は一般的なものである。槍で脇下から上に向かって突かれ、死亡する戦闘員の最後について、著者達は見聞きしていたにちがいない。したがって「脇下逆搶心」（まるで槍で脇下から突かれたような痛み）は、必ずしも氣の動きの比喩的表現ではなく、胸の激的な痛みの表現である。

人参湯証は、胃氣が不足して守胃機能が衰えたため、胃中および心下に飲の発生を見る。守られない胃氣は、ときに心下から胸へと過剰に上昇し、胸・心下の昇降の能力を越えてしまう。そのため胸・心下の氣は昇降できなくなり「心中痞」「氣結在胸」「胸滿脇下逆搶心」などをきたす。前述した枳実薤白桂枝湯証は、胸の痰濁（実）および胸・心下の氣滯（実）に病理主体であったが、人参湯証は、胃氣の不足（虚）による守胃機能の失調が病理主体であり、同様の症状を呈するといえども、その虚実、病理機序は異なっている。

枳実薤白桂枝湯証

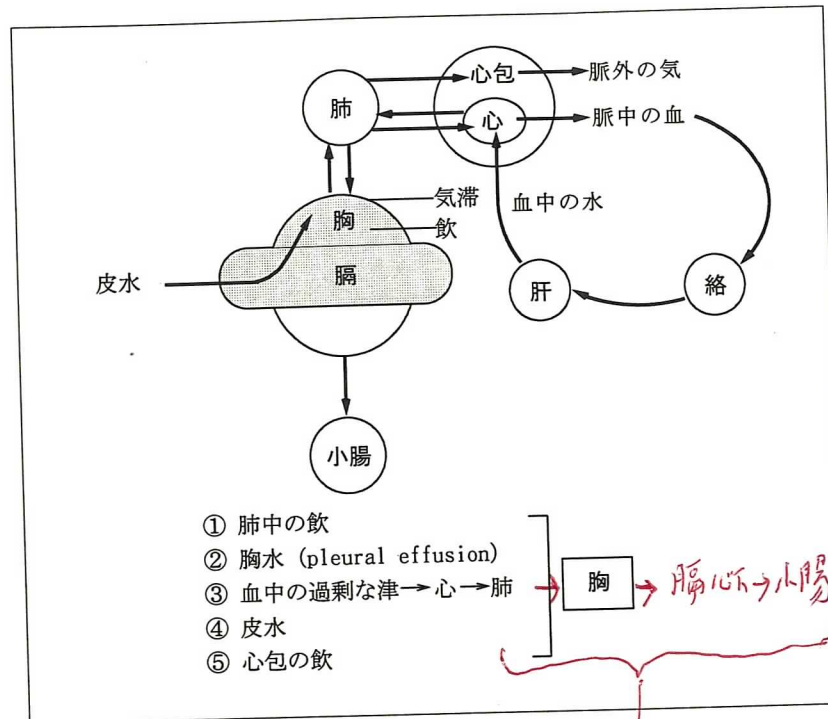


人参湯証



「胸痺，胸中気塞，短気」の同病に異治（二処方）を行っている。茯苓杏仁甘草湯証は，胸中の飲によるものであり，一方，橘枳姜湯証は，胸中の気滞によるものである。同病であってもその病理は異なるため，異なる処方に対応している。

茯苓杏仁甘草湯は，胸中の飲をとり除くばかりでなく，血中の過剰な津液および心包中の飲，さらに皮水をとり除くことが可能である。



真武湯も同様の作用があり，特に芍薬，茯苓のコンビネーションは，同様の作用がある。また真武湯は，芍薬，白朮のコンビネーションで，腹水一心下，肌水一心下への還流をはかることができる。

補

心痛

心痛には真心痛(Hart pain)と心下痛の二種類がある。

1. 真心痛

烏頭赤石脂丸

金匱要略・胸痺心痛短気病脈証治第九

第9条 心痛徹背，背痛徹心，烏頭赤石脂丸主之。

赤石脂丸方 蜀椒一両一法二分 烏頭一分炮 附子半両炮一法一分 乾姜一両一法一分 赤石脂一両一法二分
上五味，末之，蜜丸如梧子大，先食服一丸，日三服。

金匱要略・胸痺心痛短気病脈証治第九

第9条 心痛徹背，背痛徹心，烏頭赤石脂丸主之。

「真心痛が背に放散し，また背痛が心に放散するものは，烏頭赤石脂丸がこれを主治する。」

心包絡の不通により，真心痛が起こっている。

処方解説

赤石脂丸で通絡する。

九痛丸

金匱要略・胸痺心痛短気病脈証治第九

第10条 九痛丸 治九種心痛。

附子三兩炮 生狼牙一兩炙香 巴豆一兩去皮心熬研如脂

人參 乾姜 吳茱萸各一兩

上六味，末之，煉密丸如梧子大，酒下，強人初服三丸，日三服。弱者二丸。兼治卒中惡，腹脹痛，口不能言。又治連年積冷，流注心胸痛，併冷衝上氣，落馬墜車血疾等，皆主之。忌口如常法。

金匱要略・胸痺心痛短気病脈証治第九

第10条 九痛丸 治九種心痛。

「九痛丸は九種の心痛*を治す。」

処方解説

通絡により，心痛および諸種の疼痛を治す。

*九種心痛：『千金要方』卷十三

- ①蟲心痛 ②注心痛 ③風心痛 ④悸心痛 ⑤食心痛 ⑥飲心痛
⑦冷心痛 ⑧熱心痛 ⑨去來心痛

『千金要方』に九種の心痛が挙げてある。冷心痛，熱心痛の寒熱の異なる心痛に九痛丸を使用している点には興味がひかれる。

梧子大：約0.3g

薏苡附子散

金匱要略・胸痺心痛短気病脈証治第九

第7条 胸痺緩急者，薏苡附子散主之。

薏苡附子散方 薏苡仁十五兩 大附子十枚炮

上二味，杵為散，服方寸匕，日三服。

(方寸匕=1~2g)

金匱要略・胸痺心痛短気病脈証治第九

第7条 胸痺緩急者，薏苡附子散主之。

「胸痺で，時に急に発作的に痛むものは，薏苡附子散がこれを主治する。」

胸痺の病で，正気がしっかりしているときは無症状であるが，外的ストレス（寒冷など）または陰陽失調などにより一時的に正気がやや衰えると，正気の通絡作用が減弱して，発作的に胸が痛んだり，圧迫感が生じたりする「胸痺緩急」。

処方解説

薏苡仁は、『本経』によると「治筋急拘攣不可屈伸。風湿痺。下気。」とある。薏苡附子散は，薏苡仁十五兩（約225g），大附子十枚炮（約300g）を粉末にし，一回に一方寸匕（約1~2g）の少量を服用する。当院での薏苡附子散一方寸匕は，1.8gである。これによって一回分の薬量を算出すると薏苡仁0.77g，附子1.03gとなる。

$$\text{薏苡仁} 1.8 \times \frac{225}{525} \div 0.77 \text{ g}$$

$$\text{附子} 1.8 \times \frac{300}{525} \div 1.03 \text{ g}$$

て比較的長期にわたり邪正闘争が展開される結果、局所に過剰となった気は、鬱熱となって腸の局所の絡血を蒸し、膿（血敗あるいは膿）を形成する。膿はカプセライズされた局所の中に貯まり、軟らかい腫塊として触れ、その部分の腹の皮は突っ張る「此為腹内有腸癰」「腹皮急」「按之濡如腫状」。ただしはっきりとした有形の硬い腫塊があるわけではない「腹無積聚」。もともと気血の不足した状態に加えて腹内に腸癰を形成し、慢性化し、局所の鬱熱があり、血は敗れて膿に変化すると、気血はさらに不足し、皮膚の絡を養えず、皮膚は乾燥する「其身甲錯」。脈は陰血の不足および腹中の局所の熱を反映し、「数」となる。以上の病理から考えると、「細数」の脈となるであろう。

[参考]

『黄帝内経靈樞』営衛生会篇

「衛氣行于陰二十五度，行于陽二十五度，分為晝夜，故氣至陽而起，至陰而止。」（衛氣は日中に陽を二十五周巡る。）

『黄帝内経靈樞』本臓

「衛氣者，所以温分肉，充皮膚，肥腠理，司開合者也。」

皮膚の潤いについては、気と血（衛氣）の両方のバックアップが必要である。

腸癰における邪と正気の関係

	正気	邪気	症状
1	強	弱	自然治癒
2	強	強	邪正闘争のため強い症状が出る
3	弱	強	危険な状態にある（死）
4	弱	弱	慢性化した局所の邪正闘争が起こる

薏苡附子敗醬散は4のタイプに適応し、大黃牡丹皮湯は2のタイプに適応する。

処方解説

三味を散にして一方寸七を取り、水二升（400ml）で半分に着詰め、頓用で服用する。いずれにしても各一味は少量であり、附子は通絡、薏苡仁は排膿、敗醬は清熱の作用があり、これによって人体の生理的な通絡、排膿、清熱の作用を高めて腸癰を治す。

◆通絡を目的とした丸散薬について

九痛丸、赤石脂丸、薏苡附子散（薏苡附子敗醬散）

九痛丸は、前述したごとく九種の異なった病因による心痛のみならず、腹痛、打撲の痛みにも用いている。要するに九痛丸は病因がなんであれ、あらゆる疼痛性疾患に使用可能ということになる。まるで現代医学の鎮痛剤のようなものである。中医学的弁証論治によっても熱による心痛（熱心痛）、寒による心痛（冷心痛）の両方に使用することとは、理解しにくいであろう。しかし痛みというのは、その病因、原因がなんであれ、全て痛みの生じている局所、器官の絡の不通によって生じるのである。したがって病因を無視して、とりあえず絡の不通を改善することにより、疼痛を軽減させようというのである。他の赤石脂丸、薏苡附子（敗醬）散にしても、具体的には同様の用い方が可能であり、あらゆる絡の不通に対して、烏頭、附子、蜀椒、巴豆、乾姜、呉茱萸、細辛などの有毒あるいは刺激の強い生薬を少量、丸または散としてそのまま服し、人体の自ら有している通絡作用を賦活することが目的である。暑いところでも寒いところでも辛い唐辛子を食べることにより、その温通作用によって人々は元気に過ごしている。この場合も温通が主目的であり、あまり寒熱は関係ない。